古田史学の会・東海　　平成28年

東 海 の 古 代

第185号　2016年01月

会長　：　竹内　強　　副会長・発行　：　林　伸禧
編集　：　石田敬一　　投稿先アドレス：　furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
ＨＰ　：　http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

『隋書』を徹底して読む

東夷伝百済條・その２

名古屋市　　石田敬一

『隋書』東夷伝百済條について、その記述内容の理解を深めるために、前回の当会報誌において、通常の読み下しよりはやや現代語訳に近い私流の読み下しを示しましたが、例会での質疑などから判断すると、記述内容について基本的な認識を再度しっかり把握すべきと考え、議論となった事項に絞って復習します。

１　感精神話

扶余・高句麗・百済の神話は概ね共通しており、『隋書』東夷伝百済條（以下、百済伝という）においても、扶余建国の初代は東名王とされます。

その誕生について、次のとおり記述されます。

婢云：「有物状如雞子，來感於我，故有娠也。」

婢が云うには「雞子（たまご）の如しの状態の物あり、来たりて私を感精し故に妊娠を有す」

感精とは、自然物に触れることによって女性が妊娠するということで、こうした形式を感精神話（又は感精伝説、『日本の神々』谷川健一著）と呼びます。感精神話は、王朝の始祖や伝説的な英雄の生誕譚として伝えられることが多く、百済伝においても、雞子のような物によって感精したと記されます。新羅や高句麗は日光により感精して太陽の始祖王が誕生するという建国の成り立ちが語られており、感精神話の中でも日光感精神話といいます。これに対して、モンゴルやチベットの場合はそれぞれ犬、猿を先祖と語られており、こうした神話を獣祖神話といいます。これらの記事のうち日光感精神話は、古代日本の建国を考える際の参考になります。

２　百済の位置と大きさ

百済は、東明の後裔の仇台（クデ）が、帯方郡故地に建国したとあります。

帯方郡は、楽浪郡の南半分であるとされます。楽浪郡は紀元前108年に前漢によって設置され、紀元前には大楽浪郡に拡大されましたが、紀元後になると遼東7県の廃止により縮小され、3世紀初頭には遼東太守の公孫康が楽浪郡南部を分離・再開発し、帯方郡を設置しました。百済の境界は東西450里、南北900余里で、南は新羅に接し北は高麗が拒むと記述されており、その大きさは比較的小さいものと考えられます。

楽浪郡治は、平壌市街に多くの漢墓が残っており遺跡の状況から現在の平壌市街内にあったのは先ず間違いないと考えられています。

また、帯方郡治はソウルとするのが通説ですが、私は、帯

方郡は黄海道（現在の黄海南道と黄海北道）のあたりで、帯方郡治は、現道都である海洲（ヘジュ）又は沙里院（サリウォン）のいずれかではないかと考えています。

３　百済は中国の臣下の国

冊封とは、称号等を受けて天子と近隣の諸国の王が取り結ぶ君臣関係をいい、冊封された国は、宗主国に対して属国といいます。次のとおり、百済は代々中国の臣と記され開皇初年(581年)には、百済の餘璋は上開府・帯方郡公・百済王を拝します。つまり百済王は中国に冊封（さくほう）を受けており、このとき百済は中国の属国です。

歴十餘代，代臣中國，前史載之詳矣。開皇初，其王餘昌遣使貢方物，拜昌為上開府、帯方郡公、百濟王。

十余代を歴て、代々中国に臣従し前史に之の詳細を記す。開皇初年（581年）、其の王餘昌、使いを遣り方物を貢ぐ。昌は上開府、帯方郡公、百済王を拝受す。

倭王武は、自ら「使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事安東大将軍倭国王」と称し、昇明二年（478年）、宋の順帝に求めますが、「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭王」に叙任されます。倭王武の称号で百済が除かれたのは、中国が百済をすでに冊封していたためであり、「歴十餘代，代臣中國」という百済の記事と合致します。また、属国は宗主国である中国天子の年号と暦の使用が義務づけられますので、宋の元嘉暦を使用しているという記事は、百済が中国の属国であったことを裏付けます。

４　講談社版の読み下しに対する疑義

百濟自西行三日，至貊國云。

百済を西より行くこと三日、貊国に至ると云う。

『倭国伝』講談社版では、「百濟自西行三日」を「百済自り西行すること三日」とし西へ向かうとしますが、これを鵜呑みにしない方がよいと思います。「自」の記述の位置を考えると、西から東へ行く意味であり、私は貊国は百済の東にあると考えます。

天氏、尾張氏の時代（５）

名古屋市　　加藤勝美

１１　さらに尾張氏に迫るに当たって

前回、私は天孫降臨はただ一度で、邇邇芸命（ににぎのみこと）(以下「ににぎ」という）の降臨は後世に作られ、付加されたのではないか、という仮説を述べた。

次に論を進めるに際し、その前提となる前回までの論旨をざっと振り返っておこう。

先ず、第一点。

古代にあっては、倭人社会に特別大きな（倭を代表するような）國はなかった。『後漢書』や『三國志』に明記されているように、倭には百カ国以上の国々があって、それぞれ王を抱き、互いに独立国として相争っていた。中国に朝貢する国々の数は30カ国に及んでいた。

三世紀の景初年間に邪馬壹國の卑弥呼を共立して平安を保とうとするが、長く続いた形跡はない。

第二点。

この多元王朝時代の存在を裏付けるのは、統一王朝を成し遂げたと主張する『古事記』や『日本書紀』自身である。神武天皇は大和の狭い一角に過ぎない橿原で王位に就く。その後両史書に盛られた記述は征服談に充ち満ちている。十代崇神天皇は四方面に将軍を送って勢力の拡大を図っている。十二代景行天皇も、皇子の小碓命（日本武尊（やまとたけるのみこと））を西征に送り出し、続いて東征に送り出している。二十六代継体天皇朝になっても、継体が大和入りするのに長年かかっている。つまり、大和王朝は日本全国はもとより、大和周辺さえしっかりと平定できていなかったのである。だからこそ平定に次ぐ平定の記述になっているわけである。

第三点。

以上の二点に加えて『先代旧事本紀（せんだいくじほんぎ）』(以下「先代旧事」と略称する）の存在がある。前回記したように、同書は江戸中期に入ってから突然偽書の疑いが持たれた。が、600年以上にわたって最古の史書として尊重されてきた同書が偽書に変わるはずもなく、「原先代旧事」が存在したことは確実と考えていいと記した。おびただしい

量の記述が『古事記』、『日本書紀』、『古語拾遺』といった後世書の文章で埋められているが、それらはおそらく江戸時代に入ってから補記ないし追記が行われた結果にほかならない。だが、それらを除外した、「先代旧事」独自の記事は推古朝の旧伝承をとどめているのではないか、と私は結論付けた。

１２　天孫降臨はただ一度

天火明による天孫降臨が本来の伝承であって、「ににぎ」降臨は後世に作られた神話だという仮説を立てた場合、どういうことになるだろう。

第一に明らかなのは、尾張氏というのは天氏そのものだという一点である。

天火明が天氏そのものであることは、いうまでもない。「天」なる姓が冠せられているだけではない。「先代旧事」に従えば、天火明は天照大御神の孫そのものと明記されているからだ。

天火明は、十種の瑞宝を携えて７３にも及ぶ多くの神々と共に、船（天の磐船）に乗って河内から上流に進んで天降る。そのとき付き従った７３の神々の筆頭に天香語山が記されている。天香語山が筆頭に掲げられているのは当然だ。彼は天火明の唯一の御子であるからだ。つまり、天香語山は天孫の直系中の直系であって、もしも天火明王朝が存在していたとすれば、その王位を継ぐ存在だった筈である。

ところが、どうしたことか天香語山は高倉下命（たかくらじのみこと）という名に変わり、紀伊の国の熊野邑（くまのむら）に在世したと、「先代旧事」は記している。

奇妙なのはここから先の記述である。高倉下すなわち天香語山は天氏の直系も直系、第一位の直系である。それなのに、西方から「ににぎ」の孫と称する磐余彦尊（いわれひこのみこと）(神武天皇)が東征してきて、在地の豪雄長髓彦（ながすねひこ）と戦って負け、難渋したという。そこで高倉下が磐余彦を助け、最終的には、磐余彦は橿原入りを果たす。高倉下は磐余彦からその功を褒められ、侍臣に加えてもらったと「先代旧事」は記している。

誰が考えても、高倉下（＝天香語山）と磐余彦では立場が全く逆だと思われるのに、上記のような記述になっている。この記述は、天火明が73もの神々を随伴して船でやってきた、という大王者然とした記述と比較すると、あまりに落差が大きい。

それはさておき、天香語山は一男を設けるが、その名は天村雲命（あまのむらくものみこと）だという。つまり、天火明の孫だと「先代旧事」はわざわざ明記している。

天香語山を尾張氏の祖と定めると、天村雲は二世ということになる。以下、「先代旧事」は尾張氏について三世、四世、・・・と記述していく。

本来の伝承に従えば、天孫降臨は当然天火明によるただ一度きりだったに相違ない。天香語山はその天火明の唯一の御子だ。つまり、直系中の直系で、天氏そのものなのである。にもかかわらず、なぜ名が高倉下と変わるのか、さらには、なぜ突如登場した磐余彦の陪臣になってしまうのか、大きな謎である。謎という以上に、不可解としかいいようがないのである。

１３　謎の解明

先ず明らかなのは、磐余彦の登場は後代の人の手による追記ないし挿入と考えられる点である。天火明の天孫降臨が書かれているのに、それとは別の巻を設けて、「ににぎ」の天孫降臨神話を、『日本書紀』の文章をほぼそのまま掲載して挿入した手口に相似したやり方である。

天火明降臨神話ないし尾張氏や物部氏の系図記事を、ほぼ原形と思われる形でそのまま遺しているところをみると、「原先代旧事」をすっかり書き換えようという意図は感じられない。「原先代旧事」の内容を遺しつつ補記ないし追記を行っている印象が強い現行の「先代旧事」。そうした形で遺されたのは何故か。その意図を私は明確に示すことはできない。

第二に、これは私の仮説になるが、王朝交代が行われたのではないか、という推測が成立し得ることである。すなわち、天火明王朝から大和王朝への交代である。その時期は神武王朝成立時と云いたいが、必ずしもそれに限定する必要はない。なぜなら、狭い橿原の地にやっと地歩を固めた神武が、天火明王朝を一気に降したとはとても思われないからである。

100以上もの国々が乱立していたに相違ない神武の時代にあって、なぜ神武は九州からはるばる東征に向かったのか。すでに地歩を築いていた一門の天香語山を頼って出発したと考えれば、それほど不自然ではなくなる。

さてここからが私の本題である。

神武は本当に天氏一門であろうか。いずれ当

時は多元王朝の時代だったと考えれば、神武が天氏の一族であろうとなかろうと、大した相違はないかも知れない。天香語山が天氏の直系中の直系であることを考えると、天香語山が神武の陪臣だったというのは著しく不自然である。真実は逆ではないか。陪臣だったのは神武の方であって、決して天香語山ではない。少なくともそう考えるほかない。

神武は天香語山を頼って大和入りを果たした。むろん有力な陪臣ないし将軍として天香語山自身の大和入り（橿原入り）に大きな功績を果たした。こう考えると、従来は、山間奥地の熊野から大和入りをうかがった神武の行動が極めて不自然に思われたが、不自然ではなくなる。そもそも、大和入りを狙っていたのは天火明王朝の天香語山自身だったのではなかろうか。熊野に在地していたからこそ在地の大和軍と戦う準備ができたのではなかろうか。人材や兵粮を蓄え、軍事訓練を施すこともできた。いきなり九州からやってきて熊野山地をくぐり抜け、そのまま戦闘に及ぶなど普通ではとうてい考えられない。いずれにしろ神武はこの戦闘で大きな戦功を立てたことだけは間違いない。

戦闘が終了した後はどうなったのか、何の手がかりもないので一切が闇の中である。私の推測を許していただけるなら、その後の推移は次のいずれかでなかったか、と考えている。

その一は、天香語山の病死ないし戦死である。

その二は、神武の下克上である。

いずれの場合も神武が天香語山に取って代わったことだけは相違ない。つまり、神武は天氏一族ではなく、香語山に取って代わることにより、王朝一族として天氏を名乗ることになったのではないか、いわゆる神武王朝の発足である。これが私の結論である。

神武が橿原に入って以降、神武王朝は力を蓄えていく。倭国として細々とではあったが、周辺の強国に呑み込まれることなく、何とか王朝を維持し続けていく。

１４　神武王朝が小国だったのは自然

神武王朝は、後代になると日本国を代表する大王朝に成長する。が、むろん最初から大王朝だったわけではない。結果が大王朝に発展したからといって、当初からそうだったとするのは不自然極まりない。当初は群小王国群の一つだったが、年月を経て大王朝に発展していったと考えるのが素直であり、自然であろう。

ちなみに、中国側史書の『舊唐書』倭国伝には次のように見える。

日本國者倭國之別種也　以其國在日邊故以日本爲名　或曰倭國自悪其名不雅改爲日本或云日本舊小國併倭國之地。

唐王朝といえば、神武の時代より三百年余も後代に成立した王朝である。その王朝史に上記のように記されているのである。

有名なカ所なので和訳は種々行われていようが、私流に訳せば次の通りである。

「日本という国は、倭国の中の別の種の国である。日が昇ってくる辺りの東方に位置するので、日本という国名にしたという。あるいは、倭国という国名が美しくないので日本にしたともいう。あるいは、日本というのはもと小国であったが、倭国の地を併せて大きくなった国だ、ともいう」

原文及び訳文からお分かりのように、倭国という用語を一般用語としての倭、すなわち中国側から見ての「倭の国」すなわち総称的に「倭」と使用している部分と、国名として使用している部分の二とおりに使用している。前者の例は、書き出しの「倭國之別種也」と最後の「併倭國之地」に見られる。また、なかほどの「倭國自悪其名不雅」は明らかに具体的な国名すなわち固有名詞としての「倭国」であること明らかである。

肝要な点は「日本舊小國」の部分である。日本は100以上の乱立国家であったが、その中でも「日本（ヤマト）は以前小国だった」という見解を紹介しているのである。

『舊唐書』が成立したのは、『日本書紀』が成立してからなんと二百年余も経た西暦945年。十世紀半ばのことである。その頃になってもまだ「日本（ヤマト）は以前小国だった」という見解が中国側に伝わっていたことを示している。わざわざ小国というのであるから、100余国あった国々の中でも小さい方の国であったことを伺わせる。

欽明天皇と九州王朝（その２）

一宮市　竹嶌正雄

１．はじめに

欽明天皇は、531(継体25辛亥)年に筑紫君磐井が近畿政権に敗れた跡を継ぎ九州王朝の王位に就いた。当時、任那は新羅の攻勢に会い、近畿政権は近江毛野臣を派遣し復興を図ったが失敗した。欽明の九州王朝も経済的疲弊により任那への派兵は出来なかった。暫くの間、こう着状態が続いたようであり、次に動きがあったのは、537(宣化2)年で大伴金村の子・狭手彦が任那、百済救済に派遣された時である。

宣化には後継者がなく、欽明が九州より近畿政権に入り、九州政権を兼任したのである。そして、百済、任那の救援と復興に努めたが、562年に任那は滅亡した。こうした半島情勢を、欽明紀を読み解き、欽明と九州王朝との関係を推考する。

参考資料として、小学館の新編日本古典文学全集『日本書紀』①、同②(以下新編『書紀』①、同②という)を用いた。

２．任那と日本府

（１）任那

任那の名称は高句麗の広開土王碑(414年建立)に「任那加羅」とあるのが最古の例である。

『書紀』では崇神65年秋7月の条に、次のようにある。

任那国、蘇那曷叱知を遣して朝貢らしむ。任那は、筑紫国を去ること二千余里、北に海を阻てて鶏林の西南に在り。

（新編『書紀』①、295頁）

任那は百済と新羅に挟まれた半島南部の諸小国の総称で、伽耶(加羅)とも称されていた。その後、『書紀』の神功摂政紀、応神紀に見られ、『宋書』の倭国伝に倭王珍が「・・・任那・・六国諸軍事安東大将軍倭国王」(438年)と自称したとある。

任那は継体代の百済への4県割譲や新羅の侵略により、欽明23(562)年の滅亡の時には10ヶ国になっていた。同年春正月の条の文注に、次のようにある。

一本に云はく、二十一年に、任那滅ぶといふ。総ては任那と言ひ、別ては加羅国・安羅国・斯二岐国・多羅国・卒麻国・古嵯国・子他国・散半下国・乞飡国・稔礼国と言ふ。合せて十国なり。　（新編『書紀』②、445頁）

新羅の支配下に入った任那地区に対し、病の床に就いた欽明は皇太子の渟中倉太珠敷尊に「汝、新羅を打ちて、任那を封建すべし。」と言い、後を託したが復興することはなかった。

（２）日本府

『書紀』での「日本府」の初出は雄略8(464)年2月の条(同②、177頁)で、高句麗に攻められた新羅が援軍を任那王に依頼してきた記事である。「任那日本府」の初出は欽明2(541)年4月の条(同②、367頁)で、「安羅・加羅・卒麻・散半奚・多羅・斯二岐・子他等の任那各国の高官と任那の日本府・吉備臣が百済に赴いて、倶に詔書を聴いた」記事である。ここに「日本府」とあるが、「日本」の国号は旧唐書倭国日本伝にもあるように、7世紀後半以後の成立であるので、本来は「倭府」と呼ばれていたのを書紀編纂の時に変更されたと考える。また、「府」は役所を意味し、ここでは倭国から派遣された将軍たちの軍役所であったと考える。そして、この軍役所は一か所にあった常設政治機関ではなくて、任那各地にあった軍事駐屯役所であったと考える。このことは数少ないが、前述の任那日本府の初出記事の他、次の文から窺うことができる。

(欽明二年夏四月)聖明王曰く、…(略)…、加羅に赴きて、任那の日本府に会ひて相盟はしめき。

（同②、369頁）

(欽明二年)秋七月に、百済、安羅の日本府が新羅と計を通はすを聞きて、　（同②、371頁）

初出の任那日本府の任那とは南部の金海の金官国であり、吉備臣はそこの将軍である。4月の条の加羅とは任那北部の高霊加羅であり、7月の条の安羅とは任那中部の現慶尚南道咸安であると考える。

３．日本府と九州王朝

（１）雄略代の日本府役人

任那日本府は雄略代では任那国府と呼ばれ、吉

備上道臣田狭が左遷され任那国司として赴任した役所である。田狭は左遷の理由を知り、雄略を憎み新羅に救援を求めた。この時期、新羅は中つ国(近畿朝)に朝貢していなかった。次の文である。

(雄略)八年春二月に、…(略)…。天皇の位に即かせたまひしより、是の歳に至るまでに、新羅国、背き誕(いつは)りて、苞苴(みつき)入(たてまつ)らざること、今に八年なり。　(同②、175頁)

この近畿朝に反抗している新羅が高句麗の侵略を受け、任那王に救いを求め、**「高麗王、我が国を征伐つ。…(略)…。伏して救を日本府の行軍元帥等に請ひまつる」(同②、177頁)**と言っている。そして、任那王は膳臣斑鳩・吉備臣小梨・難波吉士赤目等を新羅の救援に向けた。

この新羅救援に行った日本府の膳臣等の出身地を推考する。近畿朝が反抗している新羅の救援を可とするとは思えない。雄略9(465)年3月の条に〔天皇、親ら新羅を伐たむと欲す〕とあることでも分かる。つまり、彼らは近畿朝の出身ではなくて、近畿朝以外、即ち九州王朝の出身と考える。

雄略代には近畿朝は百済と、九州王朝は新羅と友好関係を結んでいたと考えられ、日本府役人の出身が九州王朝であるので、任那の管理経営も九州王朝が行っていたと考える。更に、「日本府」が「倭府」であったとことも裏付けている。

(2) 欽明代の日本府役人

継体代には侵略を受けたのか、否か理由は分からないが、百済に任那の西側の地を頻繁に割譲している。九州王朝には任那経営が負担になっていた。そして、近畿朝に支援を求めたが、近畿朝は九州王朝の友好国である新羅を攻めるに至った。こうした中に起きたのが「磐井の叛乱」である。元々、友好関係にあった新羅を攻めるに至った近畿朝への抵抗である。

欽明元(540)年9月に難波祝津宮で新羅征討を協議した記事がある。この時、天皇が提案し、物部大連尾輿等が嗜めたとあるが、これは逆である。つまり、九州王朝より近畿入りした欽明対し、近畿政権の豪族らが新羅征討を要求したが欽明が受け入れしなかった、と考える。

大伴金村が仮病使い住吉の宅に引籠り恐れた理由の一つに、継体6(512)年の任那4県の割譲問題があるが、これもまた親新羅派の欽明の糾弾を恐れてのことと考える。

九州王朝より近畿入りした親新羅の欽明、彼の時代の任那日本府役人の出身地を考えてみる。

欽明2年夏4月以降、百済の聖明王は「日本の天皇の詔(のたま)へるは、もはら任那を復し建てよといふことを以ちてせり。」(同②、367頁)と、日本府役人と任那の旱岐等に再三語りかけている。しかし、日本府の役人、任那の旱岐等は一向に動こうとしない。こうした状況を欽明紀の中から抜き出して、日本府役人の出身地を検討してみる。

(欽明二年夏四月)聖明王曰く、…(略)…、加羅に赴きて、任那の日本府に会ひて相盟(あいちか)はしめき。　(同②、369頁)

(欽明二年)秋七月に、百済、安羅の日本府と新羅と計を通はすを聞きて、　(同②、371頁)

(欽明二年秋七月)別に安羅の日本府の河内直の、計を新羅に通はすを以ちて、深く責め罵る　(同②、373頁)

(欽明四年)冬十一月丁亥朔の申(8)午(日)に、津守連を遣して、百済に詔して曰はく、「任那の下韓に在る百済の郡令・城主、日本府に附くべし」とのたまふ。…(略)…。爾(いまし)、早々く建つべし。汝若し早く任那を建てなば、河内直等は、自づから止退くべし。豈云ふに足らむや」とのたまふ。　(同②、379頁)

(欽明四年)十二月に、…(略)…。又河内直・移那斯・麻都等、猶し安羅に住(はべ)らば、任那、恐るらくは建て難(かた)からむ。故、亦併せて表たてまつりて、乞ひて本処に移したてまへ」といふ。　(同②、381頁)

(欽明五年春正月)百済、復使を遣しして、任那の執事と日本府の執事とを召ぶ。日本府・任那、倶に執事を遣らずして、微(いやしきひと)者を遣る。　(同②、383頁)

(欽明五年二月)別に、河内直に謂はく、「昔より今に迄るまでに、唯汝が悪をのみ聞けり。汝が先祖等、倶に姦偽(うだ)を懐きて誘(いざな)ひ説けり。為歌(いかか)可君、専ら其の言を信(う)けて、国難を憂へず、吾が心に乖背き、暴虐を縦(ほしきまま)肆にす。　(同②、385頁)

(欽明五年三月)是に詔して曰はく、『的臣等、新羅に往来(かよ)ひしこと、朕が心に非ず、…(略)…。』　(同②、391頁)

(欽明五年)冬十月に、…(略)…。百済本記に云

はく、「…(略)…、日本より還りて曰く、『奏す所の河内直・移那斯・麻都等が事は、報勅無し』といへり」といふ。　(同②、397頁)
(欽明五年十一月)聖明王、謂りて曰く、「任那の国と吾が百済と、古より以来、子弟たらむことを約れり。今し日本府の印岐弥、既に新羅を討ちて、更我に代らむとす。　(同②、399頁)
…(略)…。又吉備臣・河内直・移那斯・麻都、猶し任那国に在らば、天皇、任那を建て成せと詔すとも、得べからじ。請はくは、個の四人を移して、各其の本邑に遣還さしめむことを。天皇に奏さむ其の策の三なり。　(同②、401頁)
(欽明)六年春三月に、膳臣巴提便を遣して、百済に使せしむ。　(同②、403頁)

以上が欽明2(541)年～6(545)年の日本府役人と任那旱岐に関係する抜粋記事である。同6年、7年に高麗に大乱があり、この年以後、百済は高麗との戦いが増え、高句麗関係の記事が多くなっている。

抜粋記事の内容を検討する。欽明2年には「安羅の日本府の河内直、計を新羅と通わす。」とあり、百済の聖明王は、同4年には「河内直・移那斯・麻都等、猶安羅に在れば、任那を建て直すのは難しい。本処に移して欲しい」と、更に同5年にはこの3人に加え吉備臣を加えて4人を還すことを要望している。

これに対して、近畿朝の欽明は、欽明4年に「若し早く任那を建て直したら、河内直等は、自分から退くではないか」「任那の南加羅に居る百済の郡令・城主を日本府に附けよ」とか、同5年に「的臣等、新羅に往来したことは、朕の命令ではない」とか、聖明王が渇望する河内直等の移動に対して何の返答もしていないなど、百済を突き放すような事をしている。

このような河内直等の行動と近畿朝の対応をみると河内直ら日本府の役人は近畿朝出身とは考えられない、即ち九州王朝出身と考えるのである。移那斯・麻都等の任那の旱岐も親九州王朝派である事を示している。また、欽明自身が九州王朝出身である事をも示していると考える。

(3) 九州王朝の衰退と復権

①日本府の衰退

百済の聖明王が任那復興に躍起になっている中、欽明6年と7年に高麗に大きな内乱が起きた。この内乱に乗じて、百済は高麗を攻める事を図り、欽明8(547)年4月に近畿朝に援軍を要請してきた。

翌9年4月に百済からの報告で、約束の援軍到着より前の正月9日に高麗がを攻め囲んだ、と言っきた。高麗の捕虜が言うには、事もあろうに「安羅国と日本府とが、招き来りて勧め罰たしむるに由れり」(同②、409頁)ということであった。任那諸国と日本府は、まだ反百濟派である事を示している。

これに対して欽明は「日本府と安羅とが、隣の難を救はざること、亦朕が疾む所なり」(同②、411頁)と謝罪している。近畿入りして9年目の欽明は近畿政権寄りになっており、九州王朝養護はできず、今後は任那諸国と日本府に強い態度で臨んだようである。次の文である。

(欽明十二年)是の歳に、百済の聖明王、親ら衆と二国の兵とを率て、往きて高麗を伐ち、漢城の地を獲つ。又軍を進めて平壌を討つ。
(同②、415頁)

この二国を割注では新羅と任那としているが、百済に敵対する新羅が従うわけがない。二国とは加羅国と安羅国である。つまり、任那諸国は百済に従うまでになったのである。この裏付けが次の文である。

(欽明十三年)五月戊辰朔の乙亥に、百済・加羅・安羅、(略)曰さく、「高麗と新羅、和を通じ勢を并せて、臣が国と任那とを滅さむこと謀る。…(略)…。」詔して曰はく、「今し、百済王・安羅王・加羅王、日本府の臣等と、倶に使を遣して奏せる状は聞しめし訖りぬ。」(同②、415頁)

この記事は、安羅・加羅に加えて日本府までもが百済と共に行動するようになっている事を示している。これは、近畿朝の力の増強と、九州王朝の力の衰えを表している。つまり、日本府の衰退である。

②百済の衰退

近畿朝の応援を得ている百済の力も盤石ではなくて、欽明12(551)年に征討した漢城と平壌を翌13年には放棄し、新羅に明け渡している。

そして、同14年8月に、〔新羅と狛国が共謀して、『安羅を伐ち取りて、日本の路を絶たむ』としている〕と早急な援軍を要請してきた。10月に、百済の王子

余昌は国中の軍兵を率いて高麗国に往き、交戦した。

同15年12月９日に百済は新羅に攻め入り函山城を焼いて陥落させたが、狛と新羅の共同軍と戦う為に竹斯島近辺の諸軍兵士を派遣してほしいと言ってきた。そして、余昌は百済の重臣が諫めるのも聞かずに新羅征討を謀った。この時、聖明王は余昌を慰労する為に戦場に出向き、戦死するに至った。

同16年2月に余昌は弟の王子恵を派遣して聖明王の死を報告させ、8月に聖明王の供養の為に、出家を申し出たが重臣に諫められ取り止めた。

同17年正月に百済王子恵の帰国に当たり、筑紫国の船軍に護衛させ国まで送り届けた。

同18(557)年3月朔に百済王子余昌が王位を継いで、威徳王となった。

この威徳王即位の記事の後、百済関連の然したる記事は無くなり、百済衰退が窺われる。

③任那の滅亡

近畿政権は百済との外交を止めて、新羅との外交に切り替えた。

欽明21(560)年9月に、新羅は様子窺いに身分の低い弥至己知奈末(17等官位の第11位)を派遣してきた。

欽明22年に、新羅が今回は前年より少し身分の高い久礼叱及伐干(17等官位の第9位)を派遣してきた。ところが、饗応儀礼の回数が少ないと怒り恨んで帰ってしまった。

同年内に、奴氐大舎(17等官位の第12位)を派遣してきた。難波の大郡で歓迎したが、順序を百済の後にしたので、これに怒って引き返ってしまい、船に乗って穴門館に帰り着いた。この館が新羅を問責する使者が泊まる所と聞き、新羅は城を築いて、日本に備えた。

このように、親新羅派の九州王朝から近畿朝に外交の主導が移ったことで、新羅を抑えることができなくなり、任那が新羅の攻略を受けることになった。次の文である。

（欽明）二十三年春正月に、新羅、任那の官家を打ち滅しつ。　（同②、445頁）

遂に任那諸国は新羅に征服され、日本府も引き上げねばならなくなった。しかし、欽明は任那復興に心を残しており、死に至るに当たり皇太子にそれを託した。次の文である。

（欽明三十二年）夏四月戊寅朔の壬辰に、天皇、寝疾不予したまふ。皇太子、…（略）…に曰はく、「朕、疾甚し。後事を以ちて汝に属く。汝、新羅を打ちて、任那を封建すべし。…（略）…。」とのたまふ。　（同②、461頁）

④九州王朝の復権

531年に九州王朝を継いだ欽明が、539年に近畿朝に移り、暫くは九州王朝を兼務していたが、やはり直接の支配でないので影響力も低下し、これに従い九州王朝の力も低下した。

しかし、いつまでも近畿朝の遠隔操作を受けるわけにはいかないので、当然のこととして地元に居る者の中からﾘｰﾀﾞｰを選ぶことになる。その様子を知る資料は中国史書にも日本書紀にもない。ただ、それらしき資料は『海東諸国記』に残された九州王朝年号である日本国年号である。この年号に充てられた文字の意味から様子を推測する。

西暦	天皇	元年	年号	意味・内容	解　説
531	九州	即位	発倒	磐井朝が「倒」れ、欽明朝が「発」した	『元興寺縁起』治天下七年歳次戊午による
536	欽明	5年	僧聴	「僧」（仏法）を「聴」き知った	『法王帝説』538年仏教伝来から推考
541	近畿欽明	2年	同要	「要」(王)を「同」じにする	欽明の近畿朝即位540年と九州兼任より
552		13年	貴楽	「貴」（仏法、仏像)を「楽」しむ	『紀』同年10月の記事より推考
554		15年	結清	心「清」らかに、仏法に「結」ぶ	前年の時の九州王・的臣の死による
558		19年	兄弟	「兄弟」による統治	筑紫君の児、兄火中君と弟火君による統治
559		20年	蔵和	「和」み、諍いを「蔵」める	兄弟の諍いによる分裂統治
564		25年	師安	「師」（いくさ)を「安」らかにする	任那から帰還した日本府の慰安
565		26年	和僧	「僧」（仏法)により、「和」ます	任那で戦死した日本府の慰霊
570		31年	金光	「金光」（仙界・神仙・仏の世界）	九州王朝の復興と復権を表わす

４．まとめ

九州王朝より近畿朝に入った欽明は当初は九州出身らしく親新羅派であったが、時が経つにつれ百済のよりにならざる得なかった。一方、任那諸国内に駐屯していた日本府の将軍たちは、その行動からして九州王朝から派遣された役人であったが、継体代から九州王朝は経済的疲弊により半島での影響力が低下しており、これと共に新羅への抑えが効かなくなり、遂には任那諸国の滅亡に至った。

任那を滅亡させた九州王朝であるが、欽明が近畿朝にいった後、地元に残った者の中からﾘｰﾀﾞｰを選び復権に努めた。その様子は海東諸国記に残された九州年号から窺うことができる。

九州王朝も復興し、多利思北孤の代に繋がっていった。

「東海の古代」（173号～184号）目録

号数	発行年月	分　類	表　　題	連載回数	頁	著　者	備　考
173	27年 1月	挨　拶	2015年（平成27年）年頭にあたって		1	会長 竹内　強	
		論　考	神功紀と百済王系譜－古代史覚書帳－		2	林　伸禧	別表１・２
			難波の宮の真実	2	4	竹嶋正雄	
			済州島の古代文化の謎		7	山田　裕	
174	27年 2月	論　考	難波の宮の真実	3	4	竹嶋正雄	
			古代伊豫国にみる「逸年号」		5	山田　裕	
			古代逸年号に関わる疑念	3	10	石田敬一	
175	27年 3月	論　考	古代逸年号に関わる疑念	4	1	石田敬一	
			野中寺弥勒菩薩半跏思惟像の銘文考察	1	7	竹嶋正雄	
			古代朝鮮半島における「二倍年暦」 －古代史覚書帳－		10	林　伸禧	別表 １・２・３
176	27年 4月	論　考	隅田八幡神社人物画像鏡銘文の考察		1	竹嶋正雄	
			古代逸年号に関わる疑念	5	6	石田敬一	
			推古紀における新羅遣使 －古代史覚書帳－		13	林　伸禧	
177	27年 5月	論　考	国家の成立と弥生墓の発達から見る大和の遅れ		1	竹嶋正雄	
			野中寺弥勒菩薩半跏思惟像の銘文考察	2	4	竹嶋正雄	
			古代逸年号に関わる疑念	6	5	石田敬一	
			『二中歴』年代歴の「兄弟、蔵和」年号について　－古代史覚書帳－	1	7	林　伸禧	
			都塚古墳		10	石田敬一	
			「白鳳・大化」九州年号概考 改題：九州年号－１（白鳳、大化）	1	13	佐藤章司	

号数	発行年月	分　類	表　　題	連載回数	頁	著　者	備　　考
178	27年 6月	論　考	『二中歴』年代歴の「兄弟、蔵和」年号について(追加)－古代史覚書帳－	2	1	林　伸禧	別表１～４
			南極老人		6	石田敬一	
			雄略天皇と倭王武		7	竹嶋正雄	
			九州年号－２(大化－２、朱鳥)	2	13	佐藤章司	
			法隆寺の諸問題	1	15	山田　裕	
179	27年 7月	論　考	中皇命と有間皇子		1	佐藤章司	
			雄略天皇と獲加多支鹵大王		4	竹嶋正雄	
			法隆寺の諸問題	2	9	山田　裕	
			飛鳥と難波		20	石田敬一	
180	27年 8月	報　告	愛知サマーセミナー結果報告 教科書が書かない日本古代史の真実とは！		1	石田敬一	
		論　考	天氏、尾張氏の時代	1	2	加藤勝美	
			法隆寺の諸問題	3	5	山田　裕	
			小郡宮と大郡宮と難波長柄豊碕宮		11	佐藤章司	
			倭の３０ヶ国の所在地を考える		13	竹嶋正雄	
			『二中歴』年代歴の「兄弟、蔵和」年号について（追加２）－古代史覚書帳－	3	14	林　伸禧	
			獲加多支鹵		15	石田敬一	
181	27年 9月	論　考	推古十一年の冠位十二階 －古代史覚書帳－		1	林　伸禧	別紙
			冠位十二階		3	石田敬一	
			万葉集と九州王朝		5	佐藤章司	
			天氏、尾張氏の時代	2	10	加藤勝美	
			九州年号―３（白鳳その２） ―白鳳時代を統治した天皇は誰か―	3	12	佐藤章司	
		ひろば	古代逸年号を見つけたよ		15	石田敬一	
182	27年10月	論　考	天氏、尾張氏の時代	3	1	加藤勝美	
			継体天皇即位までの過程		3	竹嶋正雄	
			倭國伝の秦王國について		8	石田敬一	
		ひろば	また古代逸年号を見つけたよ		12	石田敬一	

号数	発行年月	分　類	表　　題	連載回数	頁	著　　者	備　　考
183	27年11月	弔　辞	古田武彦先生との思い出		2	竹内　強	
			御霊前に捧ぐ －「古田武彦著作目録」－		2	林　伸禧	別紙
			古田先生とのエピソード		3	石田敬一	
		論　考	『甚目寺縁起』における古代逸年号		4	林　伸禧	
		ひろば	古田武彦著作目録		7	林　伸禧	
		論　考	天氏、尾張氏の時代	3	8	加藤勝美	
			継体天皇と九州王朝		10	竹嶌正雄	
		ひろば	また古代逸年号を見つけたよ		15	石田敬一	
184	27年12月	論　考	欽明天皇と九州王朝		1	竹嶌正雄	
			天氏、尾張氏の時代	4	6	加藤勝美	
			中国史料による日本古代史 －古代史覚書帳－		8	林　伸禧	別冊
			『隋書』を徹底して読む －東夷伝百濟書－		9	石田敬一	

また古代逸年号を見つけたよ

名古屋市　　石田敬一

成海神社

平安時代初期の宮中の年中行事や制度などを記した「延喜式」に載る「愛智郡成海神社」にあたるとされる格式の高い神社である。朱鳥元年（六八六）の創建といわれ、日本武尊、宮簀媛命、建稲種命を祭神とする。初め天神山（根古屋）に在ったが、応永（一三九四～一四二八）のころ安原宗範が鳴海城（根古屋城ともいう）を築くにあたり、この地に移された。現本殿は棟札にあるように延宝五年（一六七七）の建立と見られる。

名古屋市教育委員会

平安時代初期の宮中の年中行事や制度などを記した「延喜式」に載る「愛智郡鳴海神社」にあたるとされる格式の高い神社である。

朱鳥元年（六八六）の創建といわれ、日本武尊、宮簀媛命、建稲種命を祭神とする。初め天神山（根古屋）に在ったが、応永（一三九四～一四二八）のころ安原宗範が鳴海城（根古屋城ともいう）を築くにあたり、この地に移された。現本殿は棟札にあるように延宝五年（一六七七）の建立と見られる。

名古屋市教育委員会

これまで私の住む愛知県内で犬山市の寂光院、豊田市の足助八幡宮、名古屋市熱田区の熱田神宮の古代逸年号について、本会報誌の181、182、183号で紹介してきました。

今回は妻の実家の近くにある成海神社の創建が次の下線部のとおり「朱鳥」と記載されているのを見つけました。

成海神社は、古来より東宮大明神と呼ばれ、熱田神宮の東宮を意味しています。祭神である

建稲種命の妹の宮簀媛命は、日本武尊の妃で、草薙神剣を日本武尊より預かっており、これが東宮と呼ばれる所以かと思われます。したがって、この朱鳥は、たぶん書紀の朱鳥と考えられます。

このほかにも、探せば、まだまだ古代逸年号の伝承は各地に存在するのではないでしょうか。古代逸年号が数多く発見され、その広域性が高まることは、九州年号が公に使用された証に繋がると思います。

ぜひ、身の回りにある神社仏閣の縁起などを今一度確認していただき、ここにも古代逸年号があったと紹介されることにより、古代逸年号の存在が多くの方々の共通認識となっていくよう願うものです。

追悼会のご案内

■ 古田武彦先生追悼会のご案内

(1) 日　時　2016年1月17日(日)
13時～14時30分

(2) 場　所　大阪府立大学なんばサテライト
２階カンファレンスルーム
大阪市浪速区敷津東2-1-41

(3) 講演会　15時～16時30分
講師 新井宏氏
「鉛同位体から視た平原鏡から三角縁神獣鏡」

(4) 懇親会　17時～19時オルケスタ
会費3500円

■ 古田武彦先生「お別れの会」

(1) 日　時　2016年1月24日(日)
14時～16時30分

(2) 場　所　文京シビックセンター
４階ホール

12月13日の例会報告

■ 吉備地域に関する文献　瀬戸市　林　伸禧

『吉備群書集成』第一輯には、大変興味のある文献が判明したので紹介した。

・本宮山圓城寺縁起： 元正天皇の時、筑紫朝敵降伏の御願として霊龜元年に創建した。関連して「薩摩隼人年表」を報告した。

・石上神社（イソノカミヤシロ　ふつのみたま 祢霊 神社）：崇紳天皇の時、大和國山邊郡に移転した。

・伊勢神社（内宮、外宮）：吉備から伊勢国度会郡に移転した。

■ 欽明天皇と九州王朝　一宮市　竹嶌正雄

『記紀』と『法王帝説』・『元興寺縁起』の記事から、欽明天皇は、531(継体25)年に筑紫君磐井が近畿政権に敗れた跡を継いで九州王朝の王に即位し、その後、近畿朝に後継者がいなくなった為、九州より近畿に移り雄略同様に九州政権を兼務したと推考した。

■ 『隋書』を徹底して読む　名古屋市 石田敬一

兎角おろそかになりがちな『隋書』東夷伝の記事のうち、百済條の記述内容を再確認するため私流の読み下しを示した。

例会の予定

■ １月例会

(1) 日 時　１月10日(日)　13:30～17:00

(2) 場 所
名古屋市市政資料館 第１集会室
名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051

(3) 参加料　500円　（会員は不要）

(4) 交通機関
・地下鉄名城線「市役所」、東徒歩８分
・名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩５分
・市バス「市政資料館南」、北徒歩５分
・市バス「清水口」、南西徒歩８分
・市バス「市役所」、東徒歩８分

(5) 駐車場　市政資料館：12台＋α収容(無料)

■ ２月以降の例会日

2月14日(日)、3月13日(日)、4月17日(日)

■ 次の会報誌186号（２月号）への投稿締め切りは、１月31日(木)です。

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。例会で発表する際は資料を20部用意ください。